HABITAT NEWS

VOLUME 37



GVコミュニティ支援を開始

インドネシアとタイのコミュニティで希望を築く

ビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン(以 下、ハビタット・ジャパン)は、アジア太平洋地 域の中で海外建築ボランティアプログラム(GV: Global Village Program)へ最も多くのボランティアを 派遣しています。各国から寄せられる今以上の期 待に応えるために、ハビタット・ジャパンは今夏よりイ ンドネシアとタイで行われているコミュニティ支援地 にGVチームを継続派遣することに決めました。コ ミュニティ支援とは、家の建築支援に留まらず、コ ミュニティの住民が安心・安全に暮らせる地域を築 くために必要な支援を包括的に行い、コミュニティ 全体の自立的発展を目指す取り組みです。ハビ タット・ジャパンはGVチームを継続派遣することで、 コミュニティ支援に必要なボランティアそして資金を 支援地に送り、これらの取り組みを長期的にサポー トして参ります。

支援地の一つは、これまでにも数多くのチームを派遣したインドネシア・ジョグジャカルタ特別州の南に位置するバントゥール地域、セロパミオ地区です。この地域は丘が多く、稲作を中心とした農業と林業が盛んです。 ハビタットはセロパミオ地区内にあるスルンゴ村からコミュニティ支援に着手しています。

スルンゴ村が抱える課題:家

スルンゴ村は334世帯、1,316人が暮らす小さな村落です。しかし、その内半数にあたる141世帯がインドネシア政府の定める貧困世帯です。そのため、多くの家族が衛生環境が整備されていない、老朽化した家で暮らしています。家の壁や屋根には無数の穴が空き、雨が降ると雨水が室内に漏れて土がむき出しの床はぬかるんでしまうなど、多くの家族が不健全な住環境下での暮らしを余儀なくされています。

スルンゴ村が抱える課題:衛生環境

インドネシア全体の屋外排泄の割合は20%程度 (2015 Unicef/World Health Organization)であるにも関わらず、スルンゴ村では住民の半数以上がイレなどの衛生設備が整わない環境におかれています。近隣の洞窟には、村に十分な水を供給することができる水源はあるものの、行政が設置した水を供給するシステムはディーゼルエンジンを必要とするため稼動費が高く、その費用を村で負担することができていません。村には井戸もありますが、乾季には枯渇してしまうため体を洗うこともままならず、川や草むらで用を足さざるを得ない状況にあります。



ハビタットが目指すコミュニティ

ハビタットは、この村で104世帯が暮らす家の建築支援に取り組んでいます。また、村が抱える水問題を解消するために、稼動費が掛からない重力を利用した水供給システムの設置に加え、石灰が含まれる洞窟の水を浄化する装置の設置を目指しています。そして、水問題の解消とあわせ、トイレ100基の設置を予定しています。

日本からスルンゴ村に派遣されるチームは、GVコミュニティ支援の担い手として、家の建築に加えて衛生設備の設置支援、住民への衛生トレーニングの実施などに取り組んでいきます。GVボランティアとして、また寄付者として、スルンゴ村の家族が安心・安全に暮らせるよう、GVコミュニティ支援にご協力ください。※タイでのコミュニティ支援実施は、8月にブーケットで発生した爆弾事件の影響を受け、実施開始が来春に延期れました。



「杯を回ると、あちらこちらにハビダットか支援して建てたのかな、と思える家か点在していました。そして、杯の中には私たち日本ナームだけでなく、カナダから来ていたチームもいて、小さな村ですが、私たちを温かく迎え入れてくださっていることが分かりました。移動するバンに乗っていると、村の人が外から手を振ってくれる光景をよく目にしました。私たちが家の建築をお手伝いさせていただいたホームオーナーさんが住んでいる土地はとても広いのですが、家は老朽化していて、天井にはたくさん穴が空いていました。雨漏りが心配でした。また床は土がむきだしで、玄関にはドアがありませんでした」、そう話すのはスルンゴ村を訪れた京都外国語大学を拠点に活動するKyoto Gaidai Habitatの中内さん。中内さんは昨年夏もGVに参加しこの村を訪れ、その際に出会った家族とこの夏再会を果たしました。「同じ国・地域に戻れる良さは家族の変化を自分の目で見ることができること。支援の意義を感じることができました」とGVコミュニティ支援の良さを話します。

ボランティア人数 104名

4 月14日、続いて16日と発生した熊本地震の被災地で開始したハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンによる被災者緊急支援は、熊本県阿蘇郡西原村での緊急期における活動を終えた7月末にその活動を完了いたしました。社会福祉協議会が発災直後に設置した西原村災害ボランティアセンターでの運営サポートをはじめ、災害ボランティアセンターに寄せられる住まいのニーズにハビタットとして応えるために、住宅再建に必要な情報の提供や、建築家などの専門家を被災者に繋ぐ役割を果たすことで、一世帯でも多くの家族が、一日も早く安心・安全に暮らせる場所を取り戻せるよう支援に取り組みました。



熊本県熊本地方を震央とする地震が相次いで発生。16日には、熊本県阿蘇郡西原村でも震度7の揺れを観測しました。西原村では全家屋の6割近くが全壊・半壊の被害を受けました。

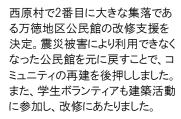


5月6日~

4月14日

キャンパスチャプターメンバーを中心に、ボランティア動員を開始。ボランティアは家屋の片付けから住宅再建に関する住民への情報提供などに取り組みました。







スタッフ2名が熊本県と大分県で初動 調査を実施。西原村で開設された災害 ボランティアセンターの運営サポート実 施を決定しました。



災害ボランティアセンター内に住まいの問題に応えるための「住まいサポートチーム」を発足。お困りごとを抱える住民と建築の専門家などを繋ぎ、住まいの問題にアプローチしてきました。



7月30日-31日

仮設住宅への入居が進む中で聞こえてきた「スペースが限られて困っている」という問題を解消するために、仮設住宅内の居住環境改善を目指した収納棚作りワークショップを実施。地元工務店とボランティアによる協力のもと、住民と一緒に45世帯分の棚を作りました。



これらの緊急支援活動の実施をお支えくださったアルワリード財団をはじめとする企業・団体・個人の皆さま、そして、被災地に赴き現地での支援活動に手を差し伸べてくださったキャンパスチャプターのメンバーを中心とした104名にのぼるボランティアの皆さま、ありがとうございました。再建した公民館では、「今年度も敬老会を無事に開催することができました」との報告を万徳地区の区長さんよりいただきました。棚作りワークショップは地元住民に引き継がれ、『西原村木もくプロジェクト』として今も取り組まれています。ハビタットの支援は完了しましたが、今後はキャンパスチャプターによる熊本支援への取り組みを支えることで、熊本の復興に寄り添って参ります。

皆さまからの温かいご支援・ご協力、誠にありがとうございました。





10月、キャンパスチャプターワークキャンプ(CC Work Camp)を静岡県御殿場で開催しました。今年は過去最多となる350名の学生が集まり、「Disaster Response - 自然災害が起こった時、あなたにできることは-」をテーマに、ボランティア活動を行うキャンパスチャプターの一員として、災害発生時に何ができるのかを考えました。学生たちはハビタットによる東北や熊本地震の活動を通して、声に出せないニーズをすくい上げることの大切さを学んでいました。

企業と手をとりあう × キャンパスチャプター

7月9日、3回目となる「Youth United Initiative」を実施しました。本企画は社会貢献に取り組む若きリーダーの育成を目指して、毎年ゴールドマン・サックス社によるご支援のもと開催しています。今年度は、日本全国30のキャンパスチャプターから60名の学生が都内に集まり、日ごろ抱える課題解決に取り組みました。10名から300名のメンバーを抱えるキャンパスチャプターのリーダー陣が集まったこともあり、多くのグループが組織運営を課題に取り上げ、ゴールドマン・サックス社から参加した15名のボランティアによる助言を得ながら課題解決に取り組みました。大きな組織の中で成功を収めるためには、個人の能力だけではなく、その能力を最大限発揮させられるマネージメントが欠かせないといった助言は、学生たちにとって新しい知見を得る機会となりました。※ハビタット・ジャパンでは、これからの社会を担うユースリーダー育成をご支援くださる企業・団体を随時募集しております。詳細につきましてはinfo@habitatjp.orgまでお問合せください。





Total State of the State of the



企業と手をとりあう × ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン

✓ ンク・オブ・アメリカ・グループは、各国のハビタット・フォー・ヒューマニティによる取り組みを30年以上 支えるグローバルパートナーです。毎年多くの社員ボランティアが世界中のハビタットと協働し、住まいとコミュニティに関わるボランティア活動に取り組んでいます。この取り 組みの一貫として、今秋、日本での活動が初めて実現しました。

秋晴れとなった10月15日、バンクオブアメリカ・メリルリンチの社員ボランティア16名が、東京都町田市にある児童養護施設に集まりました。40年前に建てられたこの施設は内壁が当時のままなため、塗装の一部が剥がれたり汚れるなどの老朽化が目立っていました。そこ

で、バンクオブアメリカ・メリルリンチの社員ボラン ティアと共に、ハビタットは子ども達がより気持ちよ く生活を送れるよう、施設内部のペンキ塗りを行 いました。

作業にあたったのは、40年の歳月でくすんでしまった廊下です。新たにペンキが塗られたことで、廊下は見違えるほど明るくなりました。この日は休日ということもあり、施設に暮らす子ども達はボラン

ティアが作業を行う様子を見にきたり、事前に用意しておいたハンドペイントに参加するなどしました。また、昼食はボランティアと一緒にとり、交流を楽しんでいるようでした。 昼食後は子ども達から素敵な歌がボランティアに贈られました。

ハビタットは家を建てるだけでなく、そこに住む人々の生活環境の向上やボランティアとの交流を通して「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現を目指しています。





羽田 達矢さん 東海大学 Same Same but Tokai 元代表(社会人)

「GVでの経験が確実に現在の活動に生きている」青年海外協力隊として、フィリピンに滞在しているキャンパスチャプター卒業生の羽田達矢さんは、彼が置かれる状況を振り返りそう話します。現在でこそ、国際協力の担い手としてフィリピンに赴

任し、防災・災害対策担当として日々町の防災支援に取り組んでいる羽田さんですが、大学に入学した2006年当時は、海外に渡航した経験がなかった

そうです。そんな彼に とって初め ての海外渡航 は、東海大学を拠点 にキャンパスチャプ ターとして活動する 『Same Same but Tokai』による海外建 築ボランティアプログラム(GV: Global Village Program)への参加でした。「旅行とは違った側面から海外を見ることができ、見るものすべてが非常に新鮮で、勉強になることばかりだった」と羽田さんは当時の思いを振り返り、このGVを機に、将来は国際協力の現場で働きたいと考えるようになったと明かしてくれました。

しかし大学卒業後、すぐに国際協力機関に就くという選択はしませんでした。4度のGV参加を通じ、「手に職がないままでは海外でも自分を活かすことができない」そう感じたと羽田さんは話します。そこで、社会人経験を積んだ後に国際協力の現場に戻り、国際貢献に従事すると決めた羽田さんは、『人の役に立てる職』に就きたいという思いから、企業に就職するのではなく、人の命に関わる『消防士』を選択し、社会人の道を歩みだし始めました。

「消防士の仕事は単に火消しとして町を守るだけではない。 地域コミュニティと関わりながら、 未然に火災を防ぐことが大切」と羽田さんは話しま

す。このコミュニティとの関わりと防災の経験を活かし、就職から5年後、羽田さんは遂に青年海外協力隊員としてフィリピンに渡りました。赴任先はフィリピンのパナイ島アクラン州カリボ町。2013年にフィリピンを襲った台風30号の被災地であり、再定住支援が始まったばかりでした。羽田さんがこの町の防災支援にあたる中で改めて見えた問題、それは貧困ゆえに脆弱な状態にある住まいの改善がいかに喫緊の課題であるかでした。その課題解消には、現地で調達できる資材を使い、現地の風土に適した家を住民と共に建てることが大切であると考え、「発災直後より支援にあたり、今もなお継続されるハビタットの活動はスピーディーで、確実にコミュニティに根差している」そう実感したと教えてくれました。

羽田さんは任地で防災支援に取り組むかたわら、ハビタットとの繋がりを大切にしたいと話します。ハビタットを起点に消防士で青年海外協力隊員として活躍する羽田さんの国際貢献はさらなる広がりを見せてくれそうです。

グローバルフェスタ参加

年、10月6日の「国際協力の日」を記念して、 その前後の週末に日本最大級の国際協力イ ベント「グローバルフェスタJAPAN」が開催されていま す。今年は10月1日・2日に東京・お台場で開催さ れ、10万人の方が来場しました。ハビタット・ジャパン は本イベントに10年連続で参加しています。今年は、 写真やパネルを使った活動紹介に加え、建築学部の 学生が制作した「家作りワークショップ(WS)」を実施し ました。このWSは、自分が住みたい理想の家を模型 で制作し、完成した家を前に世界の貧困住居問題の 現状を伝えることで、健全な住まいの必要性を訴える 取り組みです。子どもから大人までたくさんの方に参 加いただきました。キャンパスチャプターのメンバーが ボランティアとして参加し、日本全国33大学キャンパ ス、1,850名の学生が活動に参加するハビタットらし い、若者のエネルギーあふれるブースとなりました。ご 来場くださったサポーターの皆さまをはじめ、キャンパ スチャプターの皆さま、ありがとうございました。



女性のためのシェルターボランティア参加者募集



ドメスティックバイオレンス(DV)という言葉を聞いたことがある方は多いかと思いますが、DV被害にあわれた方が住まいの問題を抱えているのはご存知でしょうか。DVから逃れるために住まいを離れざるをえない方がいます。こうした方を一時的に保護する施設がシェルターです。ハビタット・ジャパンはシェルターが安心できる場所となるよう、今年の5月から定期的にシェルター内のお掃除をボランティアと共に行っています。キャンパスチャプターおよびハウスサポーターに登録されている女性限定ですが月に1度開催していますので、関心のある方は事務局までお問い合わせください。

ハウスサポーター募集

ハウスサポーター(会員)になると、月々1,000円で、ハビタット・ジャパンが行う国内外での取組みを支援し、ハビタットが目指す「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現に参加することができます。継続的にご支援いただけるハウスサポーターにご参加をお願いいたします。



詳細はホームページもしくはメールにてお問い合わせください

編集後記

今夏、日本から計30チーム、総勢442名のボランティアが、アジア太平洋地域を中心に全11ヵ国にわたり、健全な住まいを必要とする家族と一緒に建築支援にあたりました。日本支部であるハビタット・ジャバンの特徴は、本誌でもご紹介させていただいている通り、活動に多くの学生が参加していることが挙げられます。そのため、長期休暇となる春と夏は、海外建築ボランティアプログラムのピークシーズンとなり、事務局にあるカレンダーボードには、チームの出発日がびつしりと埋まり、全チームの帰国まで緊張感のある時間が続きます。夏を終え、今シーズンも全員が大きな怪我をすることなく無事活動を終えられたことに事務局一同安堵しています。来春は更なるボランティアが渡航を予定していると見込まれ、安全管理を徹底することで日本からの支援が滞ることのないよう準備に務めて参りたいと存じます。引き続きのご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

ハビタット・フォー・ヒューマニティは住まいの問題に 取り組む国際NGOです。

特定非営利活動法人ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン 〒162-0843

東京都新宿区市谷田町2-7-15 近代科学社ビル3階 Tel:(03)-5579-2550 Fax:(03)-5579-2551 Mail: info@habitatjp.org Website: www.habitatjp.org

